
名のない勇者

龍ヶ崎 雄斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名のない勇者

【ZPDF】

Z0296F

【作者名】

龍ヶ崎 雄斗

【あらすじ】

僕、平山隼人は普通の小学生。お父さんとお母さんは僕の小さい頃に離婚しているけれど、特別僕それを辛いとは感じなかった。けれどそんなある日、お母さんから僕は、「弟がいる」と言われて！？

最初、それは冗談か何かかと思つた。

人のことを揶揄する、本気ぎりぎりを低空飛行しているブラックジョークのような、性質の悪い冗談だと思つていた。

だけど、それがそういう類のものではないことを、それを言つた張本人のお母さんの目が言つていた。これは、眞実である。間違いない。

思えば僕が食事の席に着いた時から もしくは僕が家の玄関に入ってきた瞬間から お母さんは何だか背中がかゆいのかのようにもじもじしていた。ああ、そうか。それはこれの予兆だつたのかな。何があるのかとは思つたけれど、まさかいきなりこんなことを言われるとは思つてもいなかつた。

「あのね隼人、実はあなたには弟がいるの」

「やつぱりさ、魔法とか呪文がないとつまんないよな」

隣を歩いているヒロが、素早く拳を突き出しながら言つ。どうやらゲームの話をしているようだ。僕はその様子に苦笑する。

「ていうか、それはファンタジーの大前提の一つだよ」

「でも前のシリーズにはなかつたんだよな。だからオレ、途中でやめちゃつたよあれ」

この日、僕と親友のヒロとで、学校に登校しながら発売される新作のRPGゲームについて夢中で話し合つていた。その発売日は、なんといっても今日。そりやあ、話さずにはいられないよね。

「で、おまえは親とかに買つてもらえそうなの？」

ヒロはその一重の大きなくくりくりした目で僕を捉えながら訊く。こうして見ると、やつぱり彼はかっこいいんだな、と実感してしまう。事実、彼は女子によくモテるらしい。

「うーんわかんないけど、お母さんなら大丈夫かな」

お母さんならガードも甘いし。腕を組みながらそう考へていると、ヒロが大げさなくらい大きなため息を吐きだした。

「いいなあお前の所はお母さんだけで。オレのところは父さんがいるからさ、説得面倒なんだよね、鉄壁の壁だもん」
がんばれ、ヒロ交渉人。苦笑しながらそう彼をからかう。

僕にお父さんはいない。いや、事実上はいるんだけど、今はいない。つまり、僕はお母さんと現在一人暮らし。

別に事故で亡くなつたとか、あれから行方をくらましているとか、そういうことはまったく違う。

数年前、お父さんとお母さんは離婚し僕はお母さんに引き取られた、そうだ。それは僕が物心身に付く前の、本当に小さな時の出来事だつたらしいから、僕はまったく覚えていない。

そのことがショックかといえば、僕は対してそうじやない。そりや、笑い飛ばせるようなことではないだろうけれど、僕の記憶が始まった時には既にお母さんと二人きりだつたから、なんというか辛いとか悲しいなどという感情はなかつた。あるのは一つ、これが僕にとつての当たり前、ということ。だから、悲しくないし辛くない。お父さんの顔は知つてゐる。古いアルバムを押し入れの中から引っ張り出してきた時、その思い出の中に、小さな僕をおんぶして笑つてゐる推定、お父さんを見たからだ。どこにでもいそうな普通の顔だつた。これがお父さんか、とその顔をまじまじと眺めてみても、どこか現実感がなかつた。一度も会つたことがないから。少なくとも、物心つく前は。

「ねえねえ、ハヤト」

朝のホームルームが終わつてからの短い休み時間、ヒロが僕の席にやつてきた。ステップを踏むような軽い足取りで、下手したら今にも踊り出しそうだ。

「斎藤先生、昨日より身長伸びてなかつた？人間つて、あんなに急に成長するもんなんだなあ」

俺も明日になつたら身長伸びてるかな、と彼は期待に目を輝かせる。僕は思わずその場でずつこけそうになつた。また、ヒロの天然現象が始まった。

「違うよ、先生、今日は靴を変えてきたって言ってたじやない。

多分底が厚い靴だから、背が伸びたように見えたんだよ」

僕の話を聞いて、彼はなんだよおと咳きながら勢いよく肩を落とした。本当に外れてしまつのではないかと、無駄な心配をしたくらいいだ。

「ねえ本田くん」

がつくりしているところに、女子一人が現れた。脇に算数の教科書と問題集を抱えている。「算数でちょっとわからないことがあるから、教えてほしいんだけど…」

「お、いいよ。それじゃ、ハヤト。またね」

前にも言つたように、彼はその容姿から女子によくもてる。そして少し天然が入つているけれど、彼はすごく勉強ができた。テストで90点以下の点数を、僕は見たことがない。だから、彼は女子に勉強を見てもらうのをせがまるのが多くて、大忙しだ。

そんなヒロを、僕は親友として誇りに思い、そしてちょっとびり羨ましいな、と思いもする。なんで、あいつは全部の手札を持つているのだろう。

ふとヒロのほうを振り向くと、彼は顔がばつてんマークになりかけている女子に、分数がどうとか四角がどうとかと真剣に話していた。僕はそれを、一人机の上で盗み見ていた。

「ただいま…」

音をたてないように、僕はひつそりと玄関から家に入る。

下校中に、作戦は決まっていた。今日発売のゲームを、どうやつ

て買つてもらうか、だ。

最近のゲームは高額すぎて、とても僕らのお小遣い程度では手が届かない品物だった。唯一それをつかむことができるチャンスは、今の僕らにはこれしかない。

まず夕食中に普通の何でもない話題を振り、それからさりげなく『本題』のほうに入つていく。徐々にしみこませていくわけである。言葉で言つるのは簡単だけれど、これがどれだけ大変か。正直僕はげんなりしていた。

そつと扉を開けてリビングに入ると、お母さんがちょうど僕に背を向けてテレビに見入つていた。そのまま、僕は抜け足差し足で自分の部屋に引っ込もうとする。別にスパイじゃないんだからこそこそする必要はないんだけど、何となくこいつしてないと僕の心の中が読まれそうだったから、一応念のため。

自分の部屋のドアノブにあと数センチで手が届くところで、ふとお母さんがこちらを振り向いた。やばい、敵の将軍に見つかった。いや、別に見つかってもいいんだけど…。

「ああ、隼人。お帰り」

「あ、うん。ただいま」

お母さんはそれだけ会釈を交わすと、さつさとテレビに視線を移した。

…変だな。いつもなら「またこそこそして。またゲームでも買つてもらおうとおもつてているんでしょう? あんたはそういうときいつも何だかよそよそしくなるんだから なんらかかんたら」と罵倒と怒涛の言葉の弾丸が僕に撃ち込まれてもいいはずなのに、今日はそれがない。おかしいな。

まあ、ばれなかつたからいいか。今回は、彼女の読心術も役には立たなかつたということだわつ。僕はほつと一息ついてから自分の部屋の中に滑り込んだ。

それから僕は宿題を片付けてゲームをしながら機が熱すを待つて夕食まで待ち続けて、入った時と同じようにひょっこりと部屋から顔を覗かせた。

すぐさまいい匂いが僕の鼻の中に入ってきた。やつた、今日は力レード。

獲物を探すみたいにキヨロキヨロ周りを見渡すと、キッチンに野菜を刻んでいるらしきお母さんの背中を見つけた。何だか今日は、やつぱり変だ。包丁裁きに切れがない。どうしたんだろ。

とりあえずそれに気付かない振りをして、僕はそそくさとテーブルにつく。お母さんもそんな僕に気付いたらしく、ちらりとこちらを見た。

悲しい目をしている。振り向いた一瞬、お母さんはそんな目をして僕を見た。そしてすぐまな板の上の野菜に視線を戻す。僕はキッチンの方向に首を向けたまま固まってしまっていた。なんだか見てはいけないものを見てしまったような気がした。

でも、やつぱりそれも見なかつた振りをした。

しばらくしてお母さんが濃厚な香りがする大きな鍋を運んできた。蓋を開けると、閉じ込められていた湯気が一斉に飛び出す。カレーをよそい終わり、お母さんも食事の席についたところで、僕はそつそく計画に移ることにした。

「お母さん、今日ヒロ凄かったんだよ」

カレーを口に運びながら無邪気な演技をする。心の中では計画がバレないかと汗ばむ手を握りしめていた。

「誰もわからなかつた漢字、一人だけ読めたんだよ！先生だつてびっくりしてたし！」

そう、とお母さんは笑う。けれどその笑顔には何処か力がなくて、何だかおかしい。どうしたんだろ、お母さん。今日は特別変だ。そのまま会話も続かず、何故か気まずいムードのまま、僕はもくもくとカレーを口に運ぶ。ちらちらと横目でお母さんを盗み見た。いつもとなんら変わらない表情だつたけれど、違う。何かを考えてい

るように見えた。それが何かはわからないけど…。

「どうしよう、もう一つそ本題を持ち出してしまおつか。『ゲームがほしいんだけれど、お小遣いが足りないんだ』って。真剣な顔で頼めば、あるいは相談に乗つてもらえるかもしない。」

でもカモフラージュもなしにいきなりこれを持ち込むと、いつものように『お小遣いがたまるまで待ちなさい』って軽く一蹴される危険性がある。けど、今の空気じゃ会話なんて弾みそうにないしなあ。ええい、もういいや。言つちやえ。

「あのね、お母さん」

「隼人」

突然お母さんが顔をあげ、僕の言葉を遮つた。一瞬田論みがばれたのかと驚いたが、そうじゃなかつた。

お母さんは、泣いていたのだ。ぽろぽろと涙をこぼして。

「お母さん？」

「「」めんね、隼人。実はあなたにずっと隠していたことがあるの。これを言つたらあなたはびっくりするかもしれないけれど、驚かなければいけないで聞いて」

「え？え？何がどうなつてているんだ？僕に隠していたこと？…さつぱり話が見えてこなかつた。けれどお母さんは、困惑する僕にゆつくりと口を開いた。

「あのね隼人、実はあなたには弟がいるの」

「…え？その時の僕の顔は、口をあんぐりとあけたままのひどく間の抜けた表情を浮かべていたと思う。

ジツハアナタニハオトウトガイルノ。

真白になつた頭の中に、その言葉だけが何度も繰り返されていた。

そんな僕の人生を大きく揺さぶるような言葉を聞いたあとでも、平凡な明日は僕に手を振りながらゆつくりと歩いてきた。

「実はあなたには弟がいるの」

あの言葉を聞いたあとに布団にもぐつた僕の心の中に、様々な感

情が入り込んできた。

困惑、驚き、衝撃、少しの悲しみ、少しの嬉しさ、そして、怒り。どうしてそのことを僕に黙っていたんだ。そんな大事なことを、何でずっと暮らしていた僕に黙っていたんだよ。今話されたって、僕、どうしたらしいんだよ。

目をつぶつてから、朝起きても、ずっとそんな真黒な気持ちが、胸の中を渦巻いていた。イライラしているような、腹が立つような。だから朝食はいらない、ってそれだけ言って家を出てきた。お母さんは心配そうに僕をちらりと横目で見ていただけれど、僕は今、彼女の顔を見たくなかつた。

登校中も授業合間の休み時間も、ヒロが昨日発売のゲームのことをおれよこれよと話していたけれど、僕の頭はまだ見ぬ弟でいっぱいで、それは右耳から左耳へと流れしていくだけだつた。

「おいハヤト、ハヤトつてば」

帰りのホームルームが終わつたあとも、彼は飽きもせずにすぐ僕の席に飛んできた。

「お前今朝から黙り込んでるけど、どうか具合でも悪いのか？ 保健室行く？」

僕を心配して慌てるヒロ。いつもなら自分のことを思つてくれているんだな、と微笑ましく思えた。

けれど、今はそんな彼に対して癪癪を起していた。うるさいな。僕は今他のことで頭がいっぱいなんだつて。ほつといてくれよ。目の前で騒ぐなよ。

「いや、大丈夫」

黒い感情をなんとか抑えて、僕は机から立ち上がりかけた。それでも、ヒロはまだオロオロしている。

「大丈夫じゃないだろ、顔色めっちゃ悪いぞ。一回保健室行つて見もらつたほうがいいって」

「大丈夫だつて言つてるだろ！？」

僕の中の黒い塊が暴走して、僕が意識する前にそう大声を出して

いた。帰ろうと教室の入り口に殺到していた生徒たちが、一斉に僕を見た。僕の頭の中は黒で支配されて、もう止まらなかつた。

「ヒロはいつもしつこいんだよ。大丈夫って言つてるのに余計心配したりしてさ。自分が頭よくてモテるからって、調子乗るなよ。馬鹿じやない」

はつと我に帰つた時はすでに全部吐き出しちまつっていた。目の前に、口をあんぐりとあけているヒロがいた。

「…帰る」

僕はそのまま踵を返すと、駆け足で教室を飛び出した。生徒玄関の扉を蹴飛ばすように開けて、全速力で駆けだす。

あんなのはハつ当たりだ。ヒロは何にも悪くないのに、まるでヒロがすべての元凶のように当たり散らしてしまつた。心にも思つていないことを、彼に叩きつけてしまつた。

僕はあふれ出る涙を袖で拭いながら、振り返りもせずに逃げ出した。

途中、勢い余つて何度も転び、家に着くころには僕は埃まみれになつていた。転んだ時に体をかばつた手のひらは切れ、そこから血がにじみ出でていた。けれど、痛みは感じない。今度は、自分への嫌悪感で頭がいっぱいになつていてからだ。

リビングに入ると、ソファにいたお母さんがぎょっとして僕に駆け寄つてきた。

「どうしたの？ 傷だらけじゃない」

「…転んだ」

僕はふいとそっぽを向く。またお腹の中が煮えくりかえるような感覚が戻ってきた。そもそもの原因は彼女なのだ。

彼女は救急箱を持つてきて僕の掌に大げさなくらい包帯を巻くと、ほつとした反面再び悲しそうな顔になつた。

「それで、昨日も話したあなたの弟のことなんだけれど

その言葉で、僕のお腹の中の黒い水が沸騰した。素早く顔をあげ

て彼女を睨む。

「やめてよ！そんなの聞きたくない！どうして早く言つてくれなかつたんだよ！もつと早く教えてくれれば、こんなに悩まなかつたのに！ヒロとも喧嘩しなかつたのに！お母さんのせいで、僕の人生はめちゃくちゃだ！」

彼女はまるで頬を思い切りたたかれたように大きく怯んだ。わなわなとふるえ、目に涙を浮かべる。それを見て、僕に取り付いていた黒い塊は消え失せ、後に僕が残つた。

そして僕は、また逃げ出した。自分の部屋に飛び込んで、鍵をかけた。

お母さんはなにも悪くないのに、ほら、君はまたハツ当たりしている。

僕の中にいる良心をもつたもう一人の僕が、僕を指差してそう非難した。今の僕には、それを弁解できるような言葉も、勇気もなかつた。

「ご飯も食べないで部屋に閉じこもり、布団の中で僕が考えていたのは、この問題の解決法だつた。

どうすれば、この黒い塊を誰かにぶちまけずに済む？どうすれば、誰かに苛立たずに済む？どうすれば、弟という存在を受け入れられる？

何もない平凡な僕の人生に、突如干渉してきた存在。それも、血が通つた兄弟。まるで地球に移住してきた火星人のようだ。そんな彼を、どうやつたら僕の人生に迎え入れができるか。

その方法は、すぐに思いついた。小さい頃に読んだ、アルバムに写っていた僕をおんぶしている見慣れない人物 お父さん。彼に会うのだ。

おそらく、弟は彼の所にいるのだろう。お母さんたちが離婚したときに、僕らはきっと離れ離れになつたんだろう。子供の僕でも、これくらいは予測できる。

いきなり弟に会つのは、僕にとって たとえが悪いけれど 親の敵に遭うようなものだった。どうせ僕のことだから、また相手に黒い塊を投げつけて、罪悪感に苛まれるに決まっている。

だから、お父さんに会おう。お父さんと話をしよう。それで何もかもが解決するとは限らないけれど、僕に今残されている手は、それしかなかつた。

翌日 土曜日の朝早く、僕は電話が置いてあるデスクの引き出しをひっくり返し、お父さんの携帯の電話番号を探り出した。

やはりお母さんは、お父さんを忘れることはできないのだろうか。そんなことをふと思つ。だから電話番号がまだここにしまつてあるんじやないか。

僕はそのまま電話の受話器を手にして、震える指でその紙に書かれた電話番号を押す。途中、何度も怖じ氣づきそうになつたけれど、僕はやめなかつた。

すべてのボタンを押し終えたあと、それを伝えるように呼び出し音がなつた。プルルル、プルルル…。

「はい、三村です」

一生その音が鳴つてゐるかと思つてゐると、突然呼び出し音が男の人の声に変わつた。僕はあわてて、思わず受話器を落としそうになる。

まったく聞き覚えのない声だつた。小さい頃、おそらく聞いていたんだろうけれど、どこかへ忘れ去つてしまつた声。

「…お父さん」

僕は今にも飛び出してきそうな心臓を抑え込み、ゆっくりと相手に向かつてそう言つた。電話の向こうで、相手が息をのむのがわかつた。一瞬だが、緊迫したムードが流れれる。

「隼人か？」

僕のさつきの発音と同じよう、その声も多少躊躇しながら受話器の中から流れてきた。僕は深呼吸してから、ゆっくりと口を開いた。

「うん、お父さん。僕だよ。隼人だ」

「本当に久しぶりというか。あいつの顔とよく似ている。若干君のほうが高いけれど」

あいつ、とは弟のことだね。今は緊張に押し込められていて、黒い塊は出てこなかつた。ほつと安心する。

「お父さん、僕お父さんに会いたい。会つて話したいことがあるんだ。」

「ああ、いいよ。お父さんも会いたいと思つていたんだ」

お父さんはまったく嫌がる様子も見せずに即答してくれた。僕の心中に、ほんわかと温かいものが、ほんの少し戻ってきた。

「僕、お父さんが住んでいる所を見てみたいんだ。だから、そつちで待ち合わせしようよ」

「でも、結構そつちからだと遠いよ。大丈夫かい？」

「うん、僕もう赤ちゃんじゃないんだよ、と冗談交じりに言つて、向こうで父さんの笑う声が聞こえた。そうだったね。

「じゃあ、お父さんの家の近くに、大きな噴水がある公園があるから、そつちで待ち合わせしよう」

お父さんはそつちで僕に詳しい場所を何度も口で教えてくれた。目印になるもの、バスで降りる場所。そのおかげで、僕は細かい地図を作図することができた。

「じゃあ、午後の一時に、そつちで待ち合わせしよう。気をつけに来るんだよ」

お父さんとの会話は、そこで切れた。あとには、ふーっ、ふーっと電話の鳴き声が聞こえてくるだけだ。

それでも僕はお父さんの声をまだ聞いていたくて、そのまましばらく受話器に耳をあてていた。聞こえてくるのは、お父さんの声じやなかつたけれど。

数時間後、僕は座席に座り、バスの車窓におでこをもたれさせていた。プシューッと空気の抜けるような音がしてドアが閉まり、唸

り声をあげたバスがゆっくりと歩行を始めた。

お母さんは内緒で出てきた。どうせ会うのを止められると思ったから。どのみち僕は、もう誰の許可がなくても行動ができるのだ。それくらいの頭脳くらい、子供の僕はある。ただ、バス代はお小遣いから出費のため、結構痛手だけれど。

出かけるまでのあいだ、ずっと何を持っていこうかとまるで旅行に出かけるかのようにわくわくしながらじばらく悩んでいたが、結局持ってきたのはMP3プレーヤーだけだった。

窓の外を流れる建物の森を眺めながら、さつそく僕はイヤホンを耳につけて再生ボタンを押した。

イヤホンから撫でるよな優しいギターの音が聞こえてきたあと、急に曲調がロック調になり、歌が始まる。

これを歌っている人の声は少し高くて、まるで子供のように甘い歌声だった。そして何もかもを包み込んでしまつかのように、やさしい。

このバンドの名前は知らない。ただ、僕はこの曲だけが好きだつた。歌詞の内容が物語になつていて、しかもファンタジーなんだ。誰も名前を知らないどこかの誰かが、勇者となつて暗闇に包まれた世界を救う。そんなストーリーだった。何となくこの主人公の臆病な性格が僕と色々重なるところがあり、何度も聞いているうちに好きになってしまった。これなじじやいられなくなつた。

ああ 世界はなんて広いんだろう

小さく震えていた僕は この世界の一部にすぎなかつた
暗闇を払つて その足で地面を受けとめる

歩くのは怖い 怖いけど
僕を待つて いる人がいる

名のない勇者を待つて いる人がいる

彼は裸足でしつかりと大地を受けとめ、世界を救つた。

だから僕も自分の足で前に進めれば、『名のない勇者』になれるのかな。

いつの間にか眠つてしまつていたらしい。バスは終点駅についていた。飛び起きて慌てて降りた。

それからお父さんに教えてもらつて自作した地図を見ながら、若干観光気分も味わいながら、少し迷つて、公園に着いた時にはちょうどよく一時になつていた。

僕が想像していたの公園より十倍くらい広くて、噴水もまるで象のようく水を噴出していた。僕より小さな子供たちがそこで気持ちよさそうに水浴びをしている。

公園の周りを散歩しているご老人夫婦、ベンチに座つている若い女人の人と男の人、水浴びしている子供たちのお母さん。きょろきょろと見渡してもお父さんらしき人は見当たらなかつたので、噴水の近くのベンチに腰かけた。ベンチの身長は意外と高く、足が届かずにはねて、足をぶらぶらとしていた。

「隼人」

足をぶらぶらしていると、頭の上から声が聞こえてきた。ゆつくりと顔を上げる。

そこには、アルバムで見た写真よりも若干年を取つて、それに眼鏡を足した男の人があつっていた。お父さんだ。

「お父さん！」

僕は心から嬉しさがこみあげてきて、思わずチンパンジーのようにお父さんに抱きついてしまつた。お父さんはそんな僕に苦笑する。

「はは。大きくなつたな、隼人。お父さんが見たこりはこんなに小さかつたのに」

僕の隣に座り、人差指と親指で寸法を表しながらお父さんが笑つた。

「うそだあ、そんなに小さくないよ」

あはははは。しばらく一人でお腹を抱えて笑い合つた。久々の再

会の『きち』なさもなく、僕とお父さんは普通の親子みたいに接することができた。それが、僕にはうれしかった。

「お母さん、げんきにしているか？」

「うん、と頷く。

「…でも、喧嘩しちゃったんだ」

ひどくつらく当たってしまった。僕はまだあの時の自分が許せない。そんなしょんぼりしている僕の頭に、お父さんが手のひらを乗せる。

「喧嘩したつてさ、仲直りすればいいんだよ。やつすれば、また仲良しなんだから。簡単だろ？」

うん！僕は元気よく頷いた。お父さんの言葉には、まるで予言か神様の言葉のように何か信じられる温かさがあった。大丈夫、全部うまくいくみつて。

でも、今日僕がここに来たのはこうこうことをするためじゃなくて、どうしても訊きたいことがあったからだ。だから僕は、訊かなくちゃいけない。名のない勇者として。たとえ怖くても。

「ねえ、お父さん」

「ん？どうした」

お父さんはさつさつ一人で買つてきたソフトクリームを子供のように夢中に食べながら、ちらりを振り向く。これを訊いたらお父さんの笑顔を壊してしまってうだけれど、僕は訊かなくちゃいけない。

「どうして、お母さんと結婚したの？」

僕の突然の質問に、お父さんはしばらく目が点になつていた。だけどそのあと急にまじめな顔になり、まつすぐに僕の目を見た。

「運命の出会いだと思ったからだよ」

運命の出会い。なんだかまるで異世界の言葉みたいだった。ウンメイノテアイ。そんなもの、本当にこの世にあるの？剣や魔法と同じよ。

「じゃあ、どうして離婚したの」

お父さんは、一瞬ひどく悲しい目になつた。その瞳が、誰かに似

ていた。

ああそつか。弟がいるつて言つた時のお母さんの田ん、そつくりなんだ。

彼はしばらく戸惑つよう下をうつむいたあと、やがてゆっくり口を開いた。

「運命の出会いじゃなかつた、つて気づいたからだよ」

遠くで鳩が飛び去つていくのを僕の横目が捉えた。その瞬間、噴水の音すら僕の耳には入らなくなつた。

「僕の、僕のせいなの？」

僕が生まれたから、お父さんとお母さんの運命の出会いは、運命の出会いじゃなくなつちゃつたの？どうなの、どうなの、お父さん。

「違う。それは違うよ、隼人」

まるで不治の病を患つてゐるような辛い顔をした彼が、僕の肩に手を置いた。その手が少し震えているのに気づいた。

お父さんのせいなんだ。彼はそう言つた。

「でもね、隼人はお父さんの怠慢の息子だ。もちろん、君の弟もね」

その時僕の胸の中で、沸騰するのを感じた。怒り。憎しみが僕を支配する。

「そんなの、そんなの、大人のいいわけじゃないか！お父さんと離れ離れにされた、僕の気持を、どうして考えてくれなかつたの？弟がいることを今さら教えられた僕の気持ちは？ひどいよそんなの。間違つてる！」

ああ、お前はそつやつて、またハつ当たりする。

悪くない人にハつ当たりして、そつやつておまえは自分の不満をごまかそうとしている。

お前は小さな人間だ。勇者なんかじゃない。名のない勇者なんかじゃない。

「じめん、隼人」

どこかでお父さんが謝る声が聞こえてきた。いつの間にか、僕は

自分の世界の奥深くに来てしまつていたようだ。

「お父さんたちが傷つけあつてゐる姿を、君たちに見せたくないなつたんだ。離婚するときだつて、ほんとは君たちを離れ離れにしたくなかった。だけどお父さんたちのどちらか片方では、君たち二人を育てることは無理だつたんだよ。だから、仕方なく離れ離れにするしかなかつたんだ。君たちに今まで兄弟がいることを黙つていたのも、言いだす勇気がなかつたからだ。お父さんには勇気がなかつたんだよ」

でもな、お父さんたち、決めたんだ。彼はそうひと言つて顔をあげた。僕は驚いた。だつてその顔は、ある決意に満ちた、勇者の顔だつたから。

「また、お母さんと一緒に住もうと思つ。君たち兄弟を離れ離れにさせておくわけにはいかないから。たとえ運命の出会いに変えてみせる。だつてもさ、お父さんは、それを運命の出会いに変えてみせる。だつてお父さんはまだ、お母さんを愛しているからね」

たとえ傷つけ合つていても。その言葉は、独り言のよつこ小さくつぶやいた。

お父さんはやがて、ゆつくつと立上がつた。自分の足で、しつかりと。

あ。その時僕はお父さんの姿を見て思つた。

名のない勇者だ。世界の片隅の存在だけれど、確かにここにいる、小さな勇者。

僕も、なれるかな。今から。こんな臆病な僕でも、なれるかな。

そして、僕もしつかり自分の足で地面を捉えた。コンクリートは、僕を優しくキャッチしてくれた。

何故だか涙が止まらなかつた。頬つぺたを伝つて次から次へと流れしていく。あれ、僕、何で泣いているんだろう。

ああそつか。今まで僕がなんとも思つていなかつたお父さんとお母さんが、こんなにも僕のことを考えていてくれたから、その気持ちに気づけたから、嬉しいんだ。喜びなんだ。

そして僕の心中にも、一つの決心があった。光輝く勇者の証が。

「お父さん」

僕はまっすぐお父さんの田を見た。もつ、何も眩しくない。怖くない。

「僕、弟に会つよ」

それから僕は、誰に頼ることなく自分の足で歩き始めた。ひとまず休み明け、いつも登校時の待ち合わせ場所で待つているヒロに「あの時つらくなつてほんとにごめん」と頭を下げて心から謝った。勇気を出すことが、こんなにも簡単だとは思わなかつた。けど、「え？ なんのことだつけ？」とヒロが田を剥いたため、結局つやむになつちやつたんだけれどね。何はともあれ、僕らの友情はこれからも続くつてことだ。

そしてもちろん、お母さんにもちゃんと謝り、弟と会つという意思を伝えた。すると、お母さんしたら大げさに泣いちゃつて、子供をあやすより大変だつた。

「何だか隼人つたら、急に大人になつたみたい」とお母さんは言つてくれた。そうだよお母さん。僕、勇者になつたんだ。これからは、お世話をかけないよう頑張るよ。

とにかく、何もかもがうまくいき始めた。平凡でつまらない僕の人生は、今は七色に輝く虹のように、色鮮やかに光つてゐる。そんな気がする。

そして、最後にやり残したことは、たつたひとつ。

いよいよ、弟との対面の日になつた。

彼はお父さんと一緒に僕の家にくるそ�で、僕とお母さんは待つ間ずっとひびいていたりして、落ち付かなかつた。

心臓が元の位置に收まらなくなるくらい暴れていた。緊張で、いくら水を飲んでものどがすぐからからになる。握った手の汗はいつ

までも引かないし、じつとしていられない。

けれど、怖いという感情はなかつた。そんなものは、きっとあの公園の噴水にぶかぶかと浮かんでいることだらう。

ロボットのようにかくかくと動き回つていると、やがてインター ホンが鳴つた。まず最初に、お母さんが飛び出す。僕はその後ろにくつつくようについて行つた。

玄関には、嬉しそうに微笑んでいるお父さんの姿があつた。だけ ど、肝心の彼の姿が見られない。

「あれ？：彼は？」

「ああ、そうだつたとお父さんは頭を搔くと、彼の名前を呼んだ。

「来斗、ほら、前に出て」

お父さんの後ろから、恥ずかしそうにうつむいた僕と同じくらい の背丈の男の子が出てきた。彼は少し躊躇していただけれど、ゆつくりと顔をあげた。

「あ！」

僕は思わず驚いた。その顔は、僕とまるで瓜一いつだつだからだ。彼も、自分と同じ僕の顔を見て尻もちをつくほど驚いていた。

そうか、双子だったのか。どおりで探しても弟の写真がないわけだ。だって顔がそっくりなんだもの。

僕は出来るだけやわらかにほほ笑むと、右手を彼に向かつて差し出した。

来斗は恥ずかしそうにほっぺたを搔いて、それからこっこりと笑 つた。僕そつくりに。

「僕、隼人」

「僕、来斗」

僕らはお互いの掌の感触を確かめるように強く握手を交わした。

「よろしくね」

こうして僕らの名のない勇者たちとしての終わりのない旅が、始 ました。

(後書き)

この物語は、親子の絆の大切さを伝えると同時に、少年隼人の心の成長を描いています。

これが処女作なので多少の表現の間違いなどはあるかもしれません
が、どうぞ皆さんお楽しみください。

この物語が、あなたの心の片端でもいいから、少しでもあなたの歩
みの中に残りますように。そう願っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0296f/>

名のない勇者

2010年12月2日09時50分発行